

ジャンマリア・オルテス『人口論』について

藤 井 盛 夫

要約

ジャンマリア・オルテスの1790年の『人口論』は、1774年に発行された『国民経済学』で人口を定数として構築された持続可能なオープンマクロ経済モデルを発展させ、人口を変数として扱うため、人口変化、とりわけ人口増加の方策を明らかにしようとしたものと思われる。しかし『人口論』は、オルテスの没年のものであるため、校閲が行き届かず、草稿と比べると不備が目立ち、不完全なまま印刷された。後に同書はピエトロ・クストディが編集する叢書に再録されたが、クストディ自身が草稿を見たにもかかわらず、不備は放置され、しかもオルテスの他の著作から無断で流用した部分が追加された。本稿はオルテス『人口論』研究の発展のため、その底本は草稿とすべきであることを指摘するものである。

I はじめに

ジャンマリア・オルテス (Giammaria Ortes, 2.3.1713-22.7.1790.) は1774年に出版した『国民経済学 (Della economia nazionale)』に対する書評誌3誌からの酷評に反論すべく、読者の質問に対する返信の形で同書の内容を解説する『書簡集』を相次いで出版した¹⁾。その中でオルテスは

同書で人口を定数として構築した持続可能なオープンマクロ経済モデルを発展させるべく、人口を変数として扱う可能性について言及している。とりわけ人口を増加させる要因を明らかにすることで、人口増加すなわち需要増加による持続可能な社会の経済的発展、すなわち持続可能な経済成長が実現する。そのような人口増加の方策を論じたものが1790年の『国民経済学との関係における諸国の人口に関する考察 (Riflessioni sulla popolazione delle nazioni per rapporto all'economia nazionale)』(以下、書名としては『人口論』、1790年の同書を初版と呼ぶことにする)である。

『人口論』の初版はその後ピエトロ・クストディ (Pietro Custodi, 29.11.1771-15.5.1842.) が編集した『イタリア古典経済学者叢書 (Scrittori classici italiani di economia politica)』の近代編 (Parte moderna) 第24巻 (1804年) と補遺 (Supplimento) 第49巻 (1816年) に再録された

評誌は同書を3週に渡り内容を詳しく紹介するほどであったが、やはり文体の難解さと著者の意図に戸惑っているようである。これらに対するオルテスの直接の反論は『俗論の誤り (Errori popolari)』と『国民経済学』の著者による書評に対する評註として1775年に *Annotazioni dell'Autore sopra alcuni articoli di fogli letterari* を出した後に、1778年に書簡1～8を *Alcune lettere dell'Autore dell'Economia nazionale*, 1783年に書簡15を *Delle lettere sull'economia nazionale*, 1784年に書簡16～18を同じ標題の書簡集として出版した。このうち最初の『書簡集』の書簡8は手沢本で書簡10と訂正されている。残りの書簡8, 9, 11～14, 来信の一部、目次では付番されていない (つまり公表する気になかった) 書簡はランペルティコラによって活字化されている。

¹⁾ 『国民経済学』を書評したのはフィレンツェ発行の *Novelle Letterarie*, 21 aprile 1775, coll. 252-56, ローマ発行の *Efemeridi Letterarie*, 6 maggio 1775, pp. 143-144, 13 maggio 1775, pp. 151-52, 20 maggio 1775, pp. 158-60, ミラノ発行の *Gazzetta Letteraria*, 7 giugno 1775, p. 184 である。このうちローマ発行の書

(以下、合わせてクストディ版と呼ぶ)。それにより原典の参照が容易になったため、オルテスをマルサスの先駆者とする先行研究がいくつか現れた。

しかしながら、それらの先行研究が基づくオルテス『人口論』は、初版にしるクストディ版にしる、いずれも重大な問題、瑕疵があるため、それらの先行研究の貢献を損ないかねない嫌いがある。それについては以下で明らかにするが、問題を複雑にしているのは『人口論』がオルテスの没年のものであり、それをオルテスがどこまで校閲しえたのかが不明なことである。

本稿は、オルテス研究が進み、筆者にはその余裕も機会もないが、もしも『人口論』が翻訳されるならば、その解題に是非とも触れておくべき事柄を記すものである。

II 初版とクストディ版

まず、冗長になるかもしれないが、『人口論』の構成を見ておこう。初版は、1976年にフォルニ社から出版された初版の復刻版によれば、標題紙には上記の書名と年を表すMDCCLXXX(1790年)の間に“Altri di quel che vi è; Di quel che meglio/ potrebbe esservi, io scrivo.”(意味は後述、/は改行)との motto が書いてある。標題紙の裏は白紙、次のページからローマ数字の大文字 III から XVII までのノンブルの付いた序文(Prefazione)があり、XVIIの裏は白紙、XIXに各章の目次(Indice dei capitoli)があり、XIXの裏は白紙。その次のページからアラビア数字の1から71までのノンブルの付いた第1章から第17章までがあり、71の裏は白紙、その次のページも白紙となっている。つまり『人口論』は全17章である。

この初版に対しては1791年に書評誌2誌に書評が掲載された²⁾。内容は書評というよりもオル

テスの追悼文になっているが、いずれも書誌情報として書名の後に、八折判であること、総ページ71頁であること、そして“senza prefazione”(序文を欠く)と記されている。つまり書評誌が入手した『人口論』の初版には序文も、恐らく目次もなく、標題紙と本文だけであったことになる。

そこで現物はどうなっているのか確かめに行ってきた。『人口論』を収蔵しているイタリアの図書館はわずか5館であり、これは他の『俗論の誤り』や『国民経済学』に比べ少ない³⁾。しかもそのうちの1館の収蔵本はクストディ版であり、もう1館は閉館時間に間に合わず、ようやくローマ大学のアレッサンドリーナ図書館で実見することができた。縦245mm、横191mm、厚さ5mmの紙装の『人口論』は、結論から言えばフォルニ社の復刻版のとおりであったが、しかし最終ページ71の次(71の裏は白紙)にノンブルの付いていないページがあり、そこに正誤表が記載されていた⁴⁾。貴重な情報なので筆写したものを本稿末に資料1.として掲載した。

(書評誌の入手した『人口論』になぜ序文も目次も正誤表もなかったのか、復刻版になぜ正誤表がないのかは興味深い問題であるが、本稿では触

de'Letterali, 1791, t. LXXXI, pp. 290-91 とフィレンツェ発行の *Novelle Letterarie*, 22 luglio 1791, coll. 449-52 である。

³⁾ 『国民経済学』は200部印刷、100部買い上げの契約で出版したものである。最終的にオルテスは106部を買い上げたので、市販されたのは94部である。これらの市販本か献本したものが現在イタリアの図書館に収蔵されている。その数は8館であり、『俗論の誤り』も同数である。『人口論』(初版)の収蔵館の少なさと書評誌の「序文を欠く」の記載から、『人口論』が果たして1790年に出版されたかどうか定かではないので、ここまで『人口論』が1790年に「出版された」と断言できず、曖昧な表現してきた。

⁴⁾ この『人口論』には“La Contessa/ Bianca Montanari/ Boselli”(伯爵夫人ビアンカ・モンタナリ・ボセッリ)の名刺が挟まっていた。ことによると献呈本かもしれない。『俗論の誤り』も『国民経済学』もオルテスが市販前に買い上げた本を各氏に献呈していたからである。

²⁾ 『人口論』を書評したのは、ピサ発行の *Giornale*

れない。）

次にクストディ版の構成を見てみよう。まず第24巻の方は、『イタリア古典経済学者叢書』の規格に合わせた標題紙に書名と著者名（原典は匿名である）が記載され、その裏にモットー“Altri di quel che vi è; di quel che meglio/ Potrebbe esservi, io scrivo”（意味は後述）があり、その次のページから7から22までのノンブルの付いた序文、23から111までのノンブルの付いた第1章から第17章までがあり、目次はこの巻の総目次の中にあり、正誤表（ただし初版の正誤表とはほとんど一致しない）はこの巻全体の正誤表の中にある。

第49巻の方は、同様の規格で『続人口論（*Continuazione delle Riflessioni sulla popolazione*）』との標題の書かれた標題紙の裏に編者の註として、“L'Autore ha posta nell'originale l'annotazione/ che quest'opera fu fatta del 1775, e rifatta in/ parte del 1787.”（著者はこの著作が1775年に作成され、1787年に一部書き直されたとのメモをオリジナルに記している）と書かれており、その次のページから173から254までのノンブルの付いた第18章から第34章までがあり、目次は総目次の中にある。つまり『人口論』は「オリジナル（originale, 定冠詞の付いた単数名詞）」では全17章ではなく、全34章ということになる。したがってそれを確かめるために「オリジナル」を探さなければならない。

Ⅲ 草稿と各論

オルテスの書簡や手稿、またオルテス関係の資料はほとんどすべてがヴェネツィアの二つの図書館に収蔵されている⁵⁾。一つはオルテス自身の書

⁵⁾ 「ほとんどすべて」というのは、著作を出版する前に各所に配った写本は含まれていないという意味であり、それ以外はすべて収蔵されている。出版には当局の、したがってヴァチカンの許可が必要であり、その

簡（の写し）を一冊にまとめたものや、オルテス宛ての書簡を収蔵している市立コッレール図書館であり、もう一つは手稿や手沢本を収蔵している国立マルチャーナ図書館である。前に見たように、『俗論の誤り』や『国民経済学』の手沢本はこちらにある（藤井2015）。それらは印刷・出版後にオルテス自身が原稿と照らし合わせ、加筆・訂正したものであり、その日付が記されている。冒頭に記した『書簡集』は、オルテス自身の目次では全部で18通を公表する予定であったようであるが、印刷・出版されたものは12通であり、それらにも同様の加筆・訂正がなされ、未公表の残りの手書きの書簡と共に綴じられている。つまりオルテスは印刷・出版されたものは加筆・訂正をして手元に残し、原稿は廃棄したようである。そのためすでに出版された『俗論の誤り』や『国民経済学』などの著作の原稿は残っていない。ということは『人口論』が出版されたものであるならば、その手沢本が残っており、その「オリジナル」の原稿は残っていないということになる。果たしてどうなのか。

『人口論』の草稿（以下、草稿）は存在する。これはマルチャーナ図書館の整理番号 It. Cl. II., 138 (4916) の中にあり、前に見た「国民経済学に関する覚書」も収録されているものである（藤井2015）。「覚書」は19番目であったが、草稿は11番目、ff. (fascicoli) 11である。これは縦288mm、横186mmの紙に書かれ、右上にオルテスの1から37までのノンブルが付され、マルチャーナ図書館の通し番号のスタンプが112から148まで押されている（これらのノンブルは表の面にしか付されていないので、便宜的に表面を a,

ための検閲をパスするため、オルテスは関係各氏や地方の名士、高位聖職者などに原稿を送り、意見を徴している。元聖職者であり、聖職禄を支給されているオルテスにとってガリレオ裁判のような事態になれば死活問題であったからであろう。写本はヴァチカン図書館には収蔵されているようであるが、未定稿であることに変わりはない。

裏面をbとし、1a, 1b, 2a, …のように呼ぶことにする)。文章が書かれているのはおおよそ縦256mm, 横132mmの範囲で、見開きにすると全体的に中央上部に寄っており、小口側の余白が50mmほど、上余白8mm, 下余白18mm, 小口側の余白に各章の章番号と標題、参照のための側注が書かれている。1ページの行数は36行ほどである。

さて、標題紙1aには初版と同じ標題が記され、その下に“Altri di quel che v'è. Di quel che meglio/ Potrebbe avervi io scrivo.”(初版・クストディ版と綴りが少し違う)と書かれている。これは序文の終わりの方の文章を引用したものであり、前後関係から少し補って訳せば、「他の著作者は現在のことしか述べていないが、私は将来予測も行っている」との意味である。これまでオルテス研究の第一人者であるジャンフランコ・トルチェランに従って、オルテスの標題紙に記されている文言を「モットー」と読んできたが、これはむしろ「惹句」と言うべきであろう。新刊書の帯に書かれる類のもので、書店に平積みされて販売される際の宣伝効果を狙ったものであろう。

標題紙の裏の1bには「目次」が書かれている。貴重な情報なので筆写したものを本稿末に資料2.として掲載した。これについては後で触れる。

2aから5aまでが序文、5aは35行で終わり、行空けの印、二本のスラッシュが36行目に書かれている。5bは白紙、その次のページには6のノンブルが付されているが、表面・裏面、すなわち6a・6bは空白である。つまり序文の後3ページ分が空白になっている。

7aから本文第1章が始まる。第8章の途中、13bは30行目の中ほどで文章が切れ、その最後は“persone …”となっている。14aは1行目からページいっぱい36行書かれ、最初の文字は“sone”である。これは13bより前の部分を書き直され、差し替えられたため、元の13bは36行目まで書かれ、最後の文字は“per-”であったと思われる。

第17章の終わり、24aは22行目まで書かれ、7行空けて“Stesa prima del 1775. Rifatta in/ parte del 1787”と右寄せで書かれている。意味はクストディの註と少し違い、「最初1775年に書き上げ、1787年に一部書き直した」ということである。ただし1775年の最後の5は4の上に重ねて書いているように見える。オルテスにとっては『国民経済学』出版後という意識があったのであろう。

24bからは1行目から第18章が始まる。第17章までと違い、各章の間は行空けの印、二本のスラッシュが書かれている。最終は第29章、36bの19行目まで書かれ、4行空けて“Stesa prima del 1775. Rifatta/ del 1789”（最初1775年に書き上げ、1789年に書き直した）と右寄せで書かれている。ただしこの1789年の最後の9は8の上に重ねて書いているように見える⁶⁾。

その次のページは37のノンブルが付されているが、37a・37b共に空白であり、その次のページはノンブルがなく、マルチャーナ図書館の通し番号149のスタンプが押されているだけである。同番号150からff. 12が始まる。つまり37a・37bはノンブルがあるにもかかわらず空白である。この草稿は元は紙の束で、綴じられていなかったはずであり、空白のページはいつでも抜き取ることができたはずである。序文の後の3ページ分、第29章の後の2ページ分の空白は、ことによるとオルテスに加筆の意図があったのかもしれない。

草稿は第29章で終わっている。第18章以降は

6) オルテスのアラビア数字の書き方には特徴があるが、これは8の上に9を重ねたもので、7の上に8を重ねたものではない。7と9の縦棒は同じ書き方であるが、7の横棒は直線である。8の上の円に直線の横棒は読み取れない。4は一筆書きの上向きの矢印のような形をしているので、第17章のメモの1775年の最後の5は4の上に重ねて書いているように見える(第29章のメモの5は重ねて書いてはいない)。なお、これらのメモにより、『人口論』の原稿は『書簡集』以前に出来上がっていたことがわかる。『書簡集』を執筆しながら原稿をさらに推敲して書き直していったのであろう。

資料2.の目次の第17章の後の章番号の付いていない標題の順番で書かれている。つまりオルテスの当初の計画では『人口論』は全29章であったと思われる。するとクストディ版の第30章以降の5章分はどこにあるのか。クストディの作文なのか。クストディの言う「オリジナル」とはこの草稿のことではないのか。

マルチャーナ図書館の整理番号 It. Cl. XI, 135 (6850) はもう一つのオルテスの手稿を集めたものであるが、前の It. Cl. II, 138 (4916) は 303×220×42mm であるのに比べ、293×215×10mm と薄く、前のがオルテスのまとまった手稿を集めたものに対し、こちらは紙のサイズもインクの色もまちまちな断片を集めたものである。実際、上記の5章分が収録されている N. 10（マルチャーナ図書館の付番）には“Pensieri vari sopra l' Economia Nazionale”（国民経済学各論）とオルテスのではない筆跡で標題がペン書きで書かれているが、これは最初の1ページ半（66aと66b）こそ“Principio del Cap. XXVI”（『国民経済学』第6編第26章の原理）との標題はあるが、それ以後、マルチャーナ図書館の鉛筆書きの通し番号67から78（67aから78b）まで、標題はなく、オルテスのノンブルがあつたりなかつたりする断片集である。1ページの行数も30行から35行までとまちまちで、明らかに異なる時期に何かの著作の一部として書かれ、採用されなかったものの集まりである。実際、前記の「原理」には、文末に「この原理は検閲官に許可されなかったものである」とのメモがある。つまりこれらは、要するに何かの著作に採用されなかったボツ原稿であるが、廃棄しがたくて残しておいたものであろう。その中の69aから76aまでの断片にクストディ版の第30章から第34章までの5章分が含まれている。

縦283mm、横204mm、上余白13mm、下余白27mm、小口側の余白50mmの紙に34行ずつ書かれ、インクがセピア色に変色しているこのひと

まとまりの手稿（とりあえず以下では各論と呼ぶことにする）は、1行目から前の章の続きが書いてあり、24行目の余白に“Cap. XXI Delle famiglie povere e delle ricche.”（第21章 豊かな世帯と貧しい世帯）の章番号と標題があり、行空けをせずに24行目からこの第21章が始まる。これはクストディ版の『人口論』第30章の標題と同じであり、文章も（写し間違いを除いて）同じである。この各論は、74bから始まる第25章まで続き、最終は76aの19行目まで書かれており、その下は空白、76bは白紙である。つまりこの各論は全25章の何かの著作の終わりの部分であったもので、第20章または第19章までが採用され、差し替えられたもの、要するにボツ原稿であろう。クストディはこのボツ原稿を、章番号を変え、各章の標題はそのままにして『人口論』の第29章の後ろに付け加えた。別の「オリジナル」から、何の断りもなく、これは改作であり、暴挙と言わずして、何と言うべきであろうか。

草稿と各論はほぼ同じサイズの紙のほぼ同じ範囲に書かれている（各論の範囲はおおよそ245×145mmである）。違うのは草稿が36行であるのに対し、各論が34行であることと、インクの色（黒とセピア色）の違いである。しかも草稿は1775年から1789年の間に書かれたことがわかっている。この時期のオルテスの文字は、コッレール図書館収蔵のオルテス自筆の書簡（の写し）の綴りから見てわかるように、年齢を重ねるにつれてだんだん小さくなっている（藤井2015, 2016）。草稿の文字は2mmにも満たない高さの極小の大きさである。これに対し各論の文字は1ページ34行になってることからもわかるように、文字の高さも3mmを超え、大文字は5mmほどで、草稿に比べて大きい。しかもインクの色がセピア色に変色している⁷⁾。したがって各論は1775年よりも

⁷⁾ 行空けをしていないというのも一つの証拠になるかもしれない。オルテスの手稿で行空けの印である二本のスラッシュが書かれているものは、各論の入っている N. 10 の最後の 78a と 78b の献本リストかゲラ刷

前の時期、つまり10年以上かけて執筆し、1774年に出版した『国民経済学』の執筆中に並行して書かれたものと思われる。ことによると『国民経済学』に採用されなかったボツ原稿であるかもしれない。というのは、各論の5章は貴族の世帯の人口減少の要因（したがって人口増加の方策）を明らかにしようとするもので、『国民経済学』で構築したマクロ経済モデルに基づく国民300万人の人口構成を、貴族の世帯の人口ピラミッドから類推したように、オルテスは貴族の世帯を国民の標準的な世帯とみなしていたように思われるからである。それゆえ各論の5章は『人口論』の論旨からあながち外れているとは言えないであろう。しかしだからと言ってそれを無断で追加したクストディに暴挙のそしりは免れえないであろう。

IV 底本の確定

それではオルテスの『人口論』を研究するには、何を底本とするのが適切なのか。実は筆者は当初、前にオルテスの手沢本を調査したときのように（藤井2015）、初版とクストディ版を草稿・各論と照合して正誤表を作成すれば事足りると考えていた。しかしそれは句読点の位置や有無、単語の相違などの軽微な相違にとどまらず、句や節の脱漏に至るまで、あまりにも膨大な量になってしまうので、作成を断念した。初版・クストディ版と草稿・各論との相違は、平均して前者の1ページ当たり10箇所以上に及ぶことを最初に述べておきたい。

そのためここまで初版とクストディ版の相違、それらと草稿・各論との相違は惹句やメモ以外に指摘してこなかった。以下では一つ一つの相違を

指摘するのではなく、全般的な問題点を指摘するのにとどめたい。

まず初版とクストディ版は、後者は前者の単なる再録・復刻ではないことを指摘しておいて、初版と草稿の相違から始めよう。初版で目立つのは、強調のため単語の最初の文字を大文字にしている箇所が多いことである。草稿では大文字で始まる単語はあまり多くない。これはもちろん著者の指示によるものであろうが、あまり徹底しているとは言いがたい。例えばイタリア語のCapitaleは男性名詞では「資本」、女性名詞では「首都」であるが、「資本」を強調している少し後で「首都」が強調されている。これは特に初版の前半に多く、誤植も目立つところから、植字工の技量が十分ではなかったように思われる。後半では技量が上がったのか、別の植字工が担当したのか、誤植は少なくなっている。しかし問題は、句や節の脱漏が目立つことである。オルテスは同じような文型で同じような表現を重ねる、言わば対句表現をしばしば用いるが、同じ文型で、何か特徴的な言葉が草稿の違う行の（行としては）同じ位置にある場合、どちらかの文章を飛ばしてしまっている箇所がいくつかある。これは植字工によるものか、それとも印刷用の原稿として草稿を筆写した写字生によるものかはわからないが、印刷用の原稿が存在し、それにオルテスが指示をしたと考えれば、初版と草稿の相違はやむをえないことであろう⁸⁾。

次にクストディ版の方であるが、これには根本的な問題がある。これは『イタリア古典経済学者叢書』全体に言えることかもしれない（そうでないことを願いたい）が、少なくとも筆者が見たオルテスの著作には、クストディ文法とも呼べるクストディ独特の句読法があり、オルテスが多用するセミコロンをほとんど（すべてではない）コン

りの送り先のメモと思われるものに日付（最初は1773年10月10日である）と送り主ごとに二本のスラッシュがあるほかには、論文としては筆者は見たことがなく、草稿の第18章以降が初めてであるが、比較できるサンプルがないので、明確には言えない。

8) オルテスはこれまでボローニャの出版社から著作やパンフレットを発行しているが、トルチェッランによれば『人口論』はフィレンツェの出版社で印刷されたそうである。出版社の違いが影響しているのかもしれない。

マに置き換えていることである。オルテス（やオルテスと同時代の人々）の場合⁹⁾、例えば仮定文で条件節と主節との間にセミコロンを打ったり、主語を関係代名詞などで修飾するとき、あまり長くなってしまうと、主語に対応する動詞の前にセミコロンを打ったり、要するに節の切れ目にセミコロンがあるので、翻訳する場合に非常に便利である。しかしそれが無いカスタディ版は（慣れもあるのかもしれないが）非常に訳しづらい。さらに恐らくカスタディの読み（話し）方のリズムに合わせて原典にないコンマを入れたり、さらに上記のオルテスの対句表現は、同じ内容だからと言って削除してしまう（『人口論』第16章、カスタディ版102ページに編者註がある）。したがってカスタディ版は原典を忠実に再現したものではない。もちろん初版の脱漏部分も、「オリジナル」を見たはずにもかかわらず、補ってはいない。

カスタディ版の第49巻の方はどうであろうか。『人口論』第17章までの第24巻ほど写し間違いは目立つわけではないけれども、それでもカスタディ自身かまたは写生字による写し間違いは少なからず存在する。筆者は草稿・各論をカスタディ版と照合しながら、同じ「オリジナル」を見てい

るのに、なぜこんなに違うのだろうかと思ったほどである。ここでもセミコロンはほとんどコンマに置き換えられているし、脱漏はある。カスタディの時代に（といってもオルテスとそれほど違うわけではない）古語や死語となったとみなしたものは同じ意味の別の言葉（または読み取れなかったらしく全く別の意味の言葉）に置き換えられている。せっかく活字化された「オリジナル」なのに、信頼を置けないのは残念である¹⁰⁾。神は細部に宿ると言ったのは誰だったか。

したがって底本は草稿を採用すべきであるということになるが、しかしそうも行かない。というのは、草稿には第17章に意味が逆に取られかねない重大な誤りがあり、初版ではそれが直っていることに加え、特に第17章で租税の徴収者を草稿で「君主」となっているところは初版では「政府」に置き換えられている（ただしすべてではない）からである。これはもちろんオルテスの指示によるものであろう¹¹⁾。そのため底本は草稿を主とし、初版を適宜参照すべきである。

カスタディが無断で追加した第30章以降の5章はどうするか。草稿の目次（資料2.）に見られるように、オルテスの意図としては『人口論』は全29章で完結する（ただし草稿に結びの言葉はない）。したがってオルテス『人口論』は全29章とすべきである。しかしカスタディの暴挙によって、日の目を見ることのなかったボツ原稿が活字化されたことは評価しなければなるまい。翻訳の際には、もしもこの5章を含めるのであれば、

9) 『国民経済学』を翻訳している際に（実はそれ以前に『俗論の誤り』を試訳した際にも）、オルテスの以下のようなセミコロンの用法の癖に気づき、翻訳にはずいぶん役立った。『書簡集』を調査している際に、オルテスが受け取った書簡（差出人は公表されたものでは匿名になっているが、手沢本と手稿には実名が記されている）をコッレル図書館で閲覧した。どれも同じセミコロンの用法であったので、オルテスの時代にはその用法が一般的であったらしい。オルテス宛ての書簡は差出人を特定できるし、一部は活字化されている。なお、公表・未公表を問わず、オルテスの返信はかなり長く、小論文とも言えるようなものであるが、来信の方は非常に短い。当時の書簡はA4版程度の紙を縦に三つ折り、横に三つ折りし、表に宛名、裏に差出人名を書き、封蠟で閉じたもので、1枚を9分割した表と裏のうち2面が宛名と差出人名に当てられるので16面しかスペースがない。長いものでも紙2枚を折り畳んだものである。活字化された来信と公表されたオルテスの返信を比べれば、オルテスの方が実に長文であることがわかる。

10) もしもカスタディがオルテスの著作だけでなく『イタリア古典経済学者叢書』全体でこのような改作を行っているとしたら、同叢書に依拠してイタリア経済学の研究を行った者（ブスケーは確実にそうであり、ことによるとジュンペーターもそうかもしれない）の言説には信頼を置けないということになりかねない。これは恐ろしいことである。

11) 初版と草稿の相違はカッコ書きにするとか訳注を入れるなどして訳文上で処理できよう。草稿にあって初版にないものは数多いが、文字の大小を別にすれば、初版にあって草稿にないものは上記の誤りの訂正と「君主」を「政府」にしたことだけである。

各論を底本とし、クストディのように無断ではなく、是非ともそれが別の著作の一部を流用したものであることを銘記すべきである。

V おわりに

トルッチェランを追悼した、既発表論文をまとめた論文集の中に次の一節がある。

何と言っても研究者にとって重要なことは、今日ヴェネツィアのマルチャーナ図書館とコッレール図書館においてジャンマリア・オルテスの全著作と全業績を確実に再現できると言うことである。(p.5)

これには全く同感である。この二つの図書館はサン・マルコ広場を囲むコの字型の建物の、サン・マルコ寺院に向かって右側の翼の中にある。両館は建物内部では行き来できないけれども、共にヴェネツィア湾に面した外側に位置している。これほど近接した場所でオルテス研究のすべてを行うことができる。

スラッフアの場合にはそうは行かない。スラッフア文書と蔵書のあるケンブリッジ大学トリニティー・カレッジのレン・ライブラリーだけで事足りるわけではない。卒業論文はトリノのエイナウディ財団にあるし、『商品による商品の生産』のイタリア語版出版のいきさつを示すスラッフアの手紙はエイナウディ社にあり、その何種類かの原稿はミラノのマッティオーリ財団にあり、教員時代のスラッフアの時間割や講義要綱はペルージャとカリアリの大学図書館に潜って捜索しなければならない¹²⁾。

スラッフア研究にはずいぶん長い時間がかかったが、それに比べてオルテス研究が短期間で一応の成果を見たのは、一重に度重なる戦火の中でオルテスの資料を保存し続けたヴェネツィア市民と、チコーニャという優秀なコレクター、それらの手稿や書簡を活字化してきた何人もの研究者のおかげである。

これでオルテス研究は一段落したので、これからオルテスが批判したアントニオ・ジェノヴェージの研究に進むことができる。

Venezia, 13.8.2019.

参考文献

- 藤井盛夫, 「ジャンマリア・オルテスについて——その予備的研究——」, 『経済集志』第83巻第3号, 2013年10月, pp. 27-34.
- , 「ジャンマリア・オルテスの手沢本について」, 『経済集志』第85巻第2・3号, 2015年10月, pp. 109-122.
- , 「ジャンマリア・オルテスの自筆書簡について」, 『経済集志』第85巻第4号, 2016年1月, pp. 51-59.
- Ortes, Giammaria, *Della economia nazionale, parte prima, libri sei*, 1774 (藤井盛夫訳『国民経済学』, 日本経済評論社, 2018年7月).
- Torcellan, Gianfranco, *Settecento veneto e altri scritti storici*, Giappichelli, 1969.

かげで古書市場で探求したり、グーグル・ブックスで閲覧・ダウンロードが可能になった。書誌情報が十分に得られなかった昔より研究はかなり楽になった。楽ができる分だけ研究が雑にならないようにしたいものである。なおグーグル・ブックスのデータにはページの脱漏、すなわち落丁があるので注意を要する。(結局、現物を見に図書館巡りをしなければならなくなるのだが。)(追記:『イタリア人名辞典(Dizionario biografico italiano)』の刊行が進んでいて、オルテスやスラッフアの項目が読めるようになっている。スラッフアの項目はデ・ヴィーヴォとナルディによる2018年10月26日時点の記事である。)

¹²⁾ それでも近年、さまざまな資料が電子化されつつあるし、原典の閲覧・入手さえもインターネットのお

資料1. 『人口論』初版の正誤表*

		ERRATA	CORRIGE
Pag.	v.		
6	28	Quatrupedi	Quadrupedi
13	9	100000	1000000
14	17	le Popolazioni	la Popolazione
15	20	scorrono	scorrono
33	5	precorra	percorra
46	3	e	è
	11	modesima	medesima

資料2. 『人口論』草稿の目次**

Indice

Cap.

- I Progressione illimitata delle Generazioni.
- II Generazioni negli Animali limitata da Forza.
- III Generazioni negli uomini limitate da ragione.
- IV Generazioni umane limitate dal Matrimonio uguale al Celibato.
- V Stato Sociale proprio Naturale dell'Uomo.
- VI Stato sociale diviso in Nazioni diverse.
- VII Popolazioni Nazionali come formate da Natura.
- VIII Popolazioni Nazionali perchè non Naturali.
- IX Deformità delle Popolazioni Nazionali attuali.
- X Popolazioni Nazionali attuali deformate dall'Arte.
- XI Popolazioni Nazionali distinte dal proprio Governo.
- XII Uomini come resi selvaggi nello Stato Sociale.
- XIII Uomini conservati da Natura Sociali.
- XIV Popolazioni crescono colla Libertà Nazionale.
- XV Popolazioni diminuiscono colla Servitù Nazionale.
- XVI Considerazioni sulla Libertà e sulla Servitù Nazionale.
- XVII Popolazioni diminuiscono colle Imposizioni cresciute.
et cetera
- ... Occupazioni servili non accrescono popolazione.
- ... Delle contraddizioni nelle nazioni attuali deformate dall'arte.
- ... Dei modi inutili usati dai politici per accrescere le popolazioni.
- ... Popolazioni soverchie nocive alle nazioni.

Indice

- ... Della Ricchezza e Potenza Conservatrice, e dalla Distruttrice Nazionale.
- ... Della forza Politica delle Nazioni.
- ... Ricchezza e Povertà moderate nelle Nazioni Naturali.
- ... Ricchezza e Povertà eccessive nelle Nazioni Artificiali.
- ... Del Matrimonio confrontato col Celibato.
- ... Necessità uguale del Matrimonio e del Celibato.
- ... Della Popolazione sparsa per tutta la Terra.
- ... Della formazione ed estinzione delle famiglie.

(参考：各論の目次，クストディ版第30章～第34章に相当)

Cap.

- XXI Delle famiglie povere e delle ricche.
- XXII Delle famiglie nelle Città e nelle Campagne.
- XXIII Delle famiglie nobili.
- XXIV Della durata delle famiglie nobili.
- XXV Delle famiglie nobili aristocratiche.

* これらの訂正は13ページ9行目の100000の1000000への訂正以外は、文法上当然の誤りであり、初版の正誤表を見なくても訂正しうる箇所である。13ページの9行目の訂正にしても、表を挟んだすぐ下に1000000が出てくるので、文章を辿っていけば気づくはずであるが、クストディ版では直っていない。(このことからオルテスはこの正誤表を草稿と照合したのではなく、初版のゲラ刷りを見て作成したのかもしれない。そうだとすれば正誤表があるにもかかわらず初版に脱漏があるのもうなづける。オルテスが原稿と照合、そして原稿を廃棄するのは出版後のことなのであろう。)

** 第14章と第15章の下線は強調(印刷の際のイタリック体の指示)である。『国民経済学』では目次と本文中の各章の標題は必ずしも一致しなかった(訳書では凡例に記したように、本文中の標題を目次に採用した)。『人口論』の場合も、『国民経済学』のように表現が異なるのではないが、草稿自体も一致しない(草稿の目次の第11章の標題のNazionaliは本文中ではnazionaliである)。また草稿と初版・クストディ版の各章の標題も一致しないばかりか、初版とクストディ版の標題も一致しない。ただし相違は単語の最初の文字を大文字にしているか否かである。大きな相違は第17章の標題の最後の単語が初版・クストディ版ではcresciuteではなくeccessiveになっていることである。さらにクストディ版の第16章の標題はConsiderazioniだけになっている。クストディ版の各章の標題はほとんどすべて草稿と違っている。草稿と同じなのは第3章と第29章だけである。各論の場合はほぼ同じで、違うのは第31章だけである。たかが文字の大小の違いだけとはいえ、そこには著者の意図があるはずであり、訳文上に反映させるか否かは別にして、疎かにすべきではないと思う。